

J I A広島地域会まちづくり委員会から提案 (その1)

第16号(平成27年3月15日)

2011年に広島市中央公園アイデアコンペを終え、地元の建築家として何か提案しなければという思いから、日本建築家協会中国支部広島地域会のまちづくり委員会で検討し、ひろしまのランドデザイン「ひろしま市民ひろば」をまとめた。2013年3月に広島市に報告し、各種イベントにおける展示・発表等で多くの意見をいただき、現在見直し中である。さらに議論の場を広げるため、具体的な提案内容をシリーズで紹介していきたい。

その1. バスセンターの整備

広島市民のみならず他県からの高速バスや広島空港からのリムジンバスの発着点として毎日沢山人に利用される広島バスセンターは、広島市中心部の紙屋町地区周辺に分散していたバス停を一箇所に整理・統合して、昭和32年7月29日に日本初のバスターミナルとして開業されました。当時の建物は2階建ての独立した建物でした。

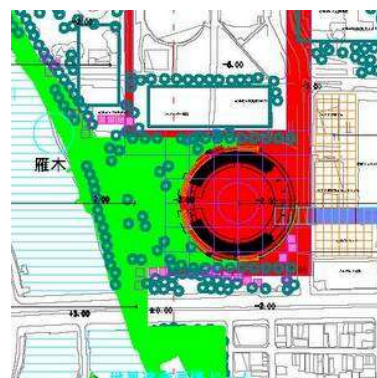
昭和49年10月にそごう広島店とアクア、広島センター街と合築した建物に建て替えられ、現在の3階の広島バスセンターの形が登場しました。当時、郊外バスと中心地デパートを直結する画期的な出来事でした。ちなみにそごう広島店とつながるアクア、広島センター街は広島バスセンターが運営するショッピング施設です。その後、2001年4月に、地下商店街通りシャレオが県・市・民間企業の出資による第三セクターにより開業し、現在の中心商業地を形成しています。私達の玄関とも言える広島バスセンターは戦後の復興の象徴として広島県民の心の支えとなっており、今や1日平均の乗降人数が40,000人、バス発着台数1700台にも昇ります。

平成21年3月の広島市民球場の移転以来、旧球場跡地の活用方策の検討が続けられていますが、いずれも跡地に限った検討であり、この千載一遇のチャンスに広島中央公園一帯のランドデザインに至る計画的、総合的、戦略的な思考が求められます。

そこで、その基本となる交通機関を考え、新交通システム、市内電車、そして地域の駐車場と機能的に連携し、スムーズに出入りできるように中心市街地の心臓ともいえるバスセンターの位置、機能を提案します。



昭和47年頃のバスセンター



市民ひろば(赤部分)の地下円形部分がバスセンター



市民ひろばのイメージ図

- ① 現バスセンターも築後40年が経ち、建替え時期がいずれ来ます。球場跡地地下をバスセンターとして整備し、移転が決まるまでは観光バスや一般車の駐車場として利用します。
- ② 鯉城通り交差点から南下し、駐車場位置から地下に入ります。バスターミナルレベルは、メルパルク1階よりマイナス4m、商工会議所西側の護岸土手からは、マイナス7m程度とします。幅員は16メートル、最大勾配は6%程度とします。
- ③ 現在のバース数(乗車11、降車10)を確保し、観光バス発着場も併せ整備します。そのため、直径100m程度の円形バスバースとします。
- ④ 地上レベルは、市民ひろばとします。そして、次回に提案するNTT再開発(既存のバスセ

ンター及びNTTに公共参加型)により、市民ひろばから元安川に向けてなだらかな都市空間を形成します。

(JIA 広島地域会まちづくり委員会委員長 前岡智之)

第17号(平成27年5月15日)

提案2. 河岸民有地を公園に (ガラガラポーン再開発事業)

河岸民有地を公園区域に編入し、河岸への視界を確保する。NTT 所有地及びバスセンターを再開発事業区域とし、ここに商工会議所、護国神社所有地等を集める。再開発施設は市民ひろば方向に開かれたプランとする。

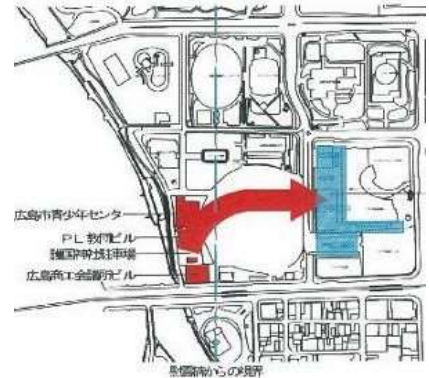
人の土地を勝手にして、と怒られるかも知れない。

原爆慰霊碑に手を合わせる時、背景に見える広島商工会議所のシルエットは、昔から指摘されてきている。広島市は、広島市景観条例を定め、世界遺産原爆ドーム周辺の景観形成を目指す。同建物は、1965年に元からあった場所に建設された。

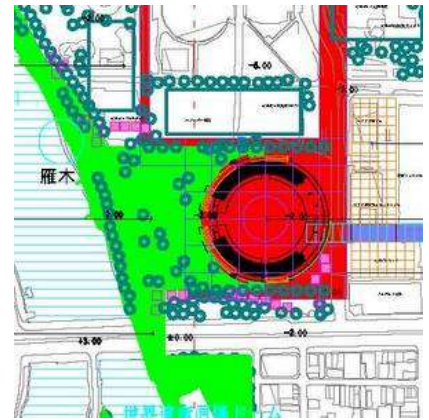
着の身着のままの復興の時にあって、むしろ復興の象徴とも言えた。築後50年、老朽化に伴って再整備が言われて久しい。元安川に沿って広島護国神社の駐車場、PL教団広島さらに広島市青少年センターと連続する一帯は、市民ひろばを大きく開放する。

一方、旧広島市民球場跡地の向かい側、メルパルク広島、そごう駐車場、バスセンターそしてNTTと続く一帯は、かつては、市民球場の裏手にあって目立たなかったが、球場が撤去された途端にその醜い姿をさらけ出してしまった。これら一帯を明日のひろしまにふさわしい都市空間に変えていくには、一つ一つで考えることでは難しい。いわゆるガラガラポーン再開発が必要である。

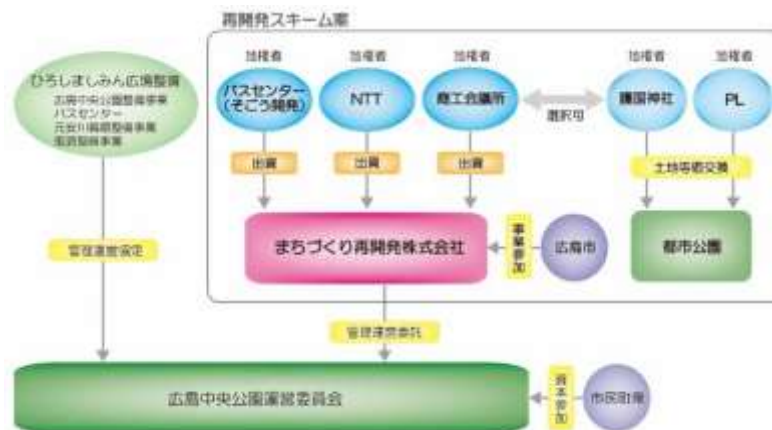
今回は球場跡の地下空間にバスセンターを整備することを提案したが、これと一連する事業として再開発を提案する。そのスキームは、下図のとおりである。大事業であるが、真の広島の復興の象徴となる。広島の都心活性化策として認定し、必要となる公共施設部分や事業推進上の必要となる部分に公的資金を導入することによって経済的合理性を確保し、市民町衆の参加により実現を図るのは、単に夢物語であろうか。



河岸側の施設を再開発ビルへ



整備後、茶色の格子が再開発ビル



(JIA 広島地域会まちづくり委員会委員長 前岡智之)

提案3. 回遊性の向上

現状の課題

中央公園全体の課題として一番大きく取り上げられるのは幹線道路で公園の内外が分断されていることである。その結果、公園内の各エリアの一体感と周辺の商店街等とのつながりが欠如している。

特に原爆ドーム側との分断は平和公園の余韻を味わうこともなく、喧騒な街中に放り出される感がある。原爆ドームに対峙する旧球場跡地はそのつなぎの役割を果たす絶好の場所と言える。

また旧球場が中央公園の入口に立ちはだかつていたため、公園内の体育館や図書館等は旧球場に背中を向けていた。旧球場跡地が人の集まる開かれた空間になれば、公園内のアクセスの中心に位置づけられる。

改善提案

私たちは旧球場跡地の半地下にバスセンターを移設し、その上部を市民ひろばにすることを提案している。そこは絶えず人の流れを呼び込み、吐き出す街のコア（心臓機能）であり、市民ひろばのレベルからペDESTリアンデッキで公園内の各エリアを結ぶ。

東側の商業施設とはアーケード空間で連結し、原爆ドーム側とはアンダーパスでつなぐ。市民ひろばのレベルは河岸の土手のレベルとし、南の電車通り側からはなだらかなスロープでアプローチでき、河岸に向かっては河川敷のレベルまで緩やかに下って開かれ、ドーム側へのアンダーパスに続く。右図の高橋志保彦氏の提案に近いイメージである。

バスセンターの移設にはハードルが高いが、私たちが提案しているNTTエリアの再開発事業が軌道に乗る前でも、先行してバスセンター移設可能な空間を整備し、観光バス・一般車両等の駐車場やイベント等の多目的スペースとして使用する。そこは地下レベルで周辺エリアを結ぶ拠点となる。

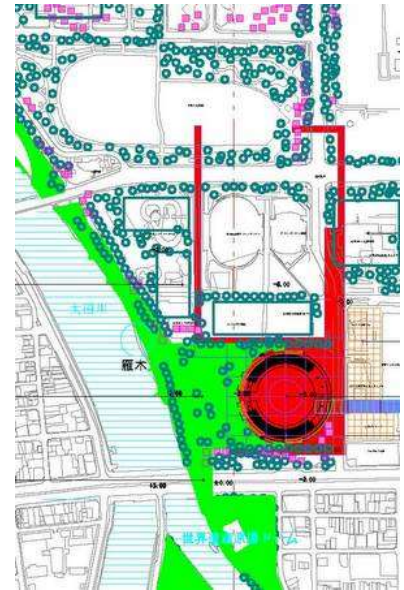
現バスセンターは築後41年が経ち、老朽化や耐震性の問題で建替えの時期がやがて訪れる。バスセンターの公益性を考えると、移転先としてこの地ほど適地はない。先見の明を持って英断を下すべきと思う。

市民ひろばを中心とした将来の姿

5月のフラワーフェスティバルの時には、平和大通りを中心とした街全体の賑わいの中で、一服できる広い空間が用意されている。8月6日の前後には国際平和コンサートが開かれ、平和式典等に参加した人たちもくつろいで心を静めることができる。

イベントのない日でもバスや公園内施設の利用者で人が集まり、時間調整や気分転換のために開かれた広場でちょっと過ごせる。近くに来た人が誰でも気軽に立ち寄れる空間作りを目指している。

(JIA 広島地域会まちづくり委員会メンバー 瀧口信二)



赤部分が広場及び
ペDESTリアンデッキ



(参考) 高橋志保彦氏の
アンダーパスの提案
(アイデアコンペで特別賞)

提案4. 公共施設の再整備

丹下健三氏は、「広島平和記念公園」の設計に際し、「平和を作り出す工場でありたい」という言葉を残した。これには「平和都市というものを指向するならば、単に平和を祈念するだけでは足りない。次世代の育成など市民生活に深く根差した何かによって、継続的かつ能動的に平和に貢献する機能を携えていなければならない。」という強い意志が感じられる。

この一帯には現在、広島市青少年センター、広島市子ども文化科学館、ファミリープール、グリーンアリーナ、広島市中央図書館等が並ぶ。「ひろしま市民ひろば」の提案には、多くは老朽化しているこれらの施設を、ひろばを囲む形で再編することを盛り込んだ。

私たちは旧市民球場跡地が持つべき役割として、市民の生活に根差した場であると同時に、国際交流の場であることと考える。

戦後70年を経て、広島は悲惨な焼け跡から文化的生活が営める街へと復興を果たした。そしてこのエリアの施設は、他の都市と変わらない平凡なものになった。しかし再編にあたって、「平和を生み出す工場」であることを求めるならば、現在と同様の平和と文化を享受できる場をつくるだけでは充分とは言えない。

広島平和記念公園を訪れる海外の観光客は特筆すべき数である。彼らはここで膨大な資料を見聴きし帰っていく。しかし、原爆で死んでいった人々が自分たちと同じ人間であり、自分も同じ被爆者となる可能性があることをどれほどの人が切実に思い、また戦争によって他国の人間を殺すことは絶対に嫌だと思うだろうか。

ここに国際交流の意味が生まれる。そこで死んでいった人々の文化的背景やその国の今を生きる人々の姿に触れることが、その死にリアリティを与える。そのために「平和を生み出す工場」に求められるのが、国際交流力を育むということである。

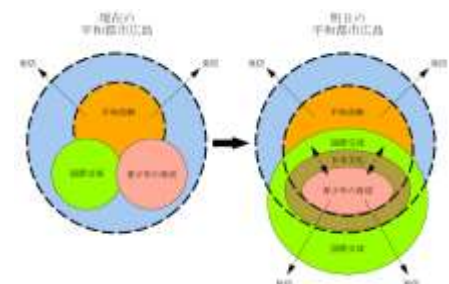
そこで、このエリアが備えていた青少年育成のための機能に加え、日本文化に親しむことを主題として再編することを提案する。その狙いの一つ目は、国際交流にあっては自国の文化を知った上で他国との違いを理解することが大前提だが、この点で日本の青少年に欠ける自国文化に対する知識を補うこと。二つ目はこのエリアに観光客を招き入れ、青少年ボランティアが日本文化を紹介する場を設けて実際の交流を生むこと。三つ目は先に述べたように国際交流により広島の悲劇にリアリティを与えること、である。

この再編により、広島は新たな役割を持って平和都市としての責任を果たすことができるだろう。広島のあるいは広島を訪れる青少年が国際交流への理解を深め、彼ら自身が「平和を生み出す工場」として歩き始めることを期待したい。

(JIA 広島地域会まちづくり委員会メンバー 高橋幸子)



公共施設の再整備（灰色部分）



明日の平和都市広島のイメージ

提案5. リバーウォークの拡充

現状の課題

- ・中央公園の川沿いには環境護岸が整備され、基町ポップラ通りとして親しまれているが、河川敷と公園内は土手で遮断されている。
- ・原爆ドーム側から長寿園方面まで遊歩道としてつながっているが、橋との交差は橋下の細い通路を潜る形になっている。
- ・川沿いの建物は川に背を向けて建っており、川側からのアクセスや景観上も好ましくない。

改善提案

- ・旧球場跡地エリアの市民ひろばと河川敷に開かれた緑地を一体化し、緑地帯にはオープンカフェ等の店を配置。北側の現芝生広場も親水広場を設けて河川敷とトンネル等により空間的に連結する。
- ・遊歩道と橋との交差は緑道の延長とし幅を広げる。
- ・河岸に沿って洒落た店舗を適宜配置し、雁木タクシーの船着場を整備する。河岸に人の流れを呼び込み、市民ひろばや親水広場と繋ぐことにより南北の動線が太くなり、公園とまちの一体感が生まれる。



リーバーウォーク
(川沿いの緑地帯)

将来の姿

美しい環境護岸は年に数回のイベント会場として賑わっているが、日常的には人の姿は少ない。親水護岸としての役割が発揮できる環境を整える。

川沿いを歩く人が増え、気軽に河川敷に降りて寛げるし、公園側の施設やオープンスペースで何かをやっていたら立ち寄れる。河岸緑地のオープンカフェでは川の景色や人の賑わいやドームを眺めながら一休み。川辺では野外コンサートが開かれ、親水広場では子供たちが遊び、親たちが見守る。サラリーマンも昼休みは河岸街で食事してちょっと散策、帰宅前は気分転換でちょっと寄り道し一服する。休日には誰かがそこで演じている。

河岸全体がみんなのものとして生かされ、川の恵に感謝してみんなが綺麗に・大事に使っている。

右の写真は徳島市の新町川水際公園。多彩な催しができる広場、様々な水の形態を演出できる水空間など都市の魅力増進と中心市街地の活性化に成功した事例。広島はこの地にそのまま適用できるとは思わないが、川沿いの活気を取り戻すアイデアとして参考になる。

(JIA 広島地域会まちづくり委員会メンバー 瀧口信二)



河岸のイメージ図



徳島市の新町川